

表6では、「道徳」が生徒から家庭にどの程度入っているかの目安になる。学年が進むとパーセンテージが小さくなるのは、精神的発達に伴う一般的な現象

が表われているとも考えられるが、授業内容にもよるであろう。

表 7

		「道徳」で学んだことが今以上に家庭の中に入った方がよいですか		
		入った方がよい	入らない方がよい	無 回 答
中 1	73 (96%)	0	3 (4%)	
中 2	63 (92)	3 (4%)	3 (4)	

「道徳」が家庭の中で好意的に考えられていることが表7からわかる。しかし、生徒は必ずしも積極的に「道徳」を好んでいるわけではなく、この溝は問題である。教師は、生徒が進んで家庭に持ち帰れる内容を

持った授業をし、保護者は子供を非難、叱責するようなことは避け、共に考え合う雰囲気を作ることが必要であろう。

尚、この調査の記入保護者は下記のようなものである。

表 8

		この調査を記入された方は			
		父	母	そ の 他	無 回 答
中 1	23 (30%)	51 (67%)	2 (3%)	0	
中 2	27 (39)	41 (60)	0	1 (1%)	

Ⅲ. ま と め

「道徳」は、きめつけや、強制ではなく、「修身」からぬけ出し、新しい方向を見つけるには、必然的に民主的な教育でなければならない。その為には、広い教授資料と教師の十分な研修、よりよい指導方法が求められよう。又、文部省の指導書に満足せず、広い教材を求め折角充実して実施された授業は、各教師がその要点をまとめておいて、互に翌年度以降の生きた参考資料とし合うようにすることも大切なことであろう。この調査から、「道徳」は、学校に於ける授業時間だけでなく、家庭環境、社会環境の中で生かされるものであるから、家庭と一層深い、緊密な連絡が為されなくてはならないということが出て来た。その為には、まず、教師側と保護者側が子供をより良く伸ばして行く

ための素地を作っていくことが大切であろう。そうすることによって生徒は、教師、家庭を頼りに自らを成長させ、十分な思考力を持つことができるようになるであろう。

Ⅳ. 今後の方向

今回の調査により、生徒の「道徳」に対する反応は、昨年と殆んど変わりなく、解決すべき問題が変動したとも考えられない。又、家庭の関心は昨年よりも強くなっており好ましいが、今後は尚一層家庭との連絡を緊密にする必要がある。又、教師は、高校の倫社との連携を何らかの形でつくり出すことが必要である。その為にも、適当な教材を求める努力をして行かねばならない。(盛 田)

第9報 中学の生徒会活動の育成

Ⅰ. はじめに

本校における中学生徒会活動は、中学生徒会と高校生徒会が相互に作用しあい、より高次の活動が期待される面もないわけではなかったが、総じて活動の独自性、自発性が失なわれるという結果に終ることが多かった。高校生徒会活動の指導面で、数年前からとくに

留意してきた事項は、その点の是正を実際の行事に即して行ないつつ、生徒の自主性を伸展させる点にあったが、それが中学生徒会活動の指導面には、まだ十分に滲透してはいなかった。そのため、中学生徒会活動の高校生徒会への依存度が強く、中学生なりのまとまった独自の活動を通して、社会性を身につける機会を失する嫌いがあり、積極的に自己を律してゆく態度を

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

育成する場面が生かし切られないうらみがあった。

そこで、本年からは、中学の生徒会活動も活発にし高校に依存しない独自のものに育て、生徒の自律性を訓練する場として有効に活用させる方策を考えていくということになった。その実践の要点をまとめ、中学の生徒会活動を変革してゆく要素を洗い出すことができれば、何らかの参考に供することも可能と思われる。

以下、略述するのはそうした実践の第一歩にすぎず成果もいまだしの感がするが、この中に、生徒と共に泥にまみれながら積極的に試行錯誤を積み重ねているわれわれの姿と、今後の積みかさねによってその解明が期待される問題点のいくつかを見て頂ければ幸いである。

II. いくつかの試み

(1) 朝のラジオ体操

以前から、中学生徒会の仕事の一つとして毎朝始業前に校庭でラジオ体操を行っている。従来の方法はバラバラに集まって、めいめいでやる形のものであった。しかし本年度前期の生徒会執行部は、その努力目標の一つとしてこのラジオ体操のやり方の改善を取り上げ、生徒議会に提出し、各ホーム・ルームにおいてもよく話し合うように要請していた。

その結果まとめ上げられたことは、(i) 各クラスごとに時間までに整列して体操をする。(ii) ラジオ体操推進委員を各クラス2名ずつ選出し、委員は輪番で台上に立って指揮したり、遅刻者のチェックをする。

(iii) 3回以上遅刻したものはそれぞれのH・R担任教官に連絡して注意を与えてもらうようにする。ということで、生徒会行事としてその運営に積極的な努力が続けられ、以前とは見違えるほど整然とした行事になった。

なお、このラジオ体操後のわずかな時間を生徒集会の形で利用し、投書への回答を中心にしたその時々の問題を取り上げる機会として活用することにもして、効果を上げている。

(2) 生徒集会について

昨年まで、本校では週一回の中・高合同朝礼が月曜日の朝20分間行なわれてきた。しかし本年からはそのより効率の高い運営をねらって、これを中学朝礼・高校朝礼・中高合同朝礼の三本立てとし、単独朝礼の裏の行事としてそれぞれの生徒集会を持つことにした。

最初は執行部も勝手がわからずとまどいがちで、顧問の力を借りてやっと時間をもちこたえる状態であったが、事前の生徒会執行部の話し合いの徹底や、生徒議会での討論を反映させる運営方向を取らせることに

より、3・4回目からは、逆に生徒会活動の節目としての役割を果たすようになってきて、何かの行事で生徒集会が取りやめになったときなどは、その代わりの集会を放課後などに持ちたいとの要求が出てくるまでになってきた。集会は集合から解散まですべて生徒会執行部の手で行なわせ、教官側は適宜助言する程度で運営させ、中学生全体のまとまりある行動を自発的に誘発させるよう指導し、あわせて個々の生徒が積極的態で集会に参加する気持ちを持つように指導している。

(3) 他校生徒会訪問

国立の中学という枠の中にあることが、自分達にとってどんな意味を持つのかという興味から、また他山の石を求める気持ちも多分にあって生徒会執行部の方から他校の生徒会を訪問してみたいという希望が出てきた。これまでしばらく、こういう希望が全く出なかったのが、本年度の第2学期になって生徒の方から出るようになったのは、生徒会の活動がやや軌道に乗り始めた一つの証左と考え、さっそく本校所在地を学区とする公立中学の生徒会訪問を実施するようとりはからった。

そこでの話し合いで生徒の得たものは、(1) 本校の雰囲気は明るく自由であるが、ものごとに真剣に取り組む態度にやや欠ける面があるのではないか。(2) 本校生は服装や持ち物などが派手で、人の目につくものを身につけることに誇りを持つようなところがある。という二点に集約されるものであった。

この訪問の少し前の生徒議会において、「生徒の授業中の態度や生活態度がだらけているようだが、その原因について」という議題で討論したときの結論は、各生徒の自覚のなさに問題があるということだったが、今度の他校訪問によってそのことがより具体的に示されたといつてよい。この感想は、生徒集会の時に全生徒に報告され、向上心を持つよう互に戒めあい努力することが申し合わされた。

(4) 高校生徒会の影響

同じ校内に高校生徒会がある関係から、上級生である高校生徒会の影響を有形無形に受ける機会が多いが、その中から中学の生徒会活動に有益なものを見分ける判断力が充分でないので、教師の指導がこの面でも大切となっている。今はやりのベルマーク運動に参加しようという決定も、その動機は高校生徒会で行っているからということであったが、指導により、その本来の意義を確認させたいえ中学生徒会の活動としてもふさわしいということで行なわせることにした。しかし、校内放送局を新設して活動しようという、高校生徒会の機構にならった発案は、全く形だけの模倣に終るおそれがあったので再考するよう指導しなけれ

ばならなかった。

このように、中学生徒会活動にあっては、かたわらからの助言や指導が、中学生の自主性や社会性の未発達部分を不即不離の形で補うもので、同時に活動内容自体の正しい伸展をめざすものであることが望ましいように思われる。

Ⅲ. おわりに

以上、本年度前期の中学生徒会活動を中心とする特徴的事項について、その要点をまとめてみた。中には、本校の特殊な事情を反映する問題点も含まれているが、これらの問題点を中心にして、今後の実践の過程でなんらかの解答を見出ししていきたいと考えてい

る。

最近生徒会は年度末に発行予定の「学園誌」の編集委員の中心を、2年生にしようとしたが、実際の仕事を始めるとやはり3年生が中心にならなくては、仕事の進行が思わしくない。クラスマッチの場合の体力差を取り上げて見ても、1年と3年の差は大変なものである。生徒議会の議長が2年に移ると議事はとたんに停滞する。等々、中学における心身の学年による差は大きい。この学年差を克服して、一体となった生徒会活動を推進するにはどう指導したらよいか、また、各学年の発達段階に応じた発展的目標をいかに設定したらよいか。これらは早急に解決しなくてはならない重要かつ本質的な課題である。(酒井)

第10報 中学における朝礼・生徒集会に関する二三の調査

I. はじめに

既に第5報に述べたように、本校は管理上中・高一体となっているが、指導面においては一体が必ずしも能率的というわけにはゆかず、むしろ一体であると、中・高どちらに対しても徹底を欠く場面も少なくない。それで昨年度までは、中高合同で行なってきた月曜日の始業前の20分間の朝礼を、本年からは3週単位に区切り、第1週は中・高合同朝礼、第2週は高朝礼、中集会、第3週は中朝礼、高集会として多角的な運営を始めてみた。

この改正に対しては、高校の方について第1学期末に行なった調査の結果から朝礼・集会とも中高別ないしは改正された現行の方法を支持するものが過半数という結果が出たので、中学の方に対しても挙手によ

り、その大体の傾向を調査してみたところ、数においてはやや高校を上廻る支持が明らかになった。

従って、方法的にはかなりの成果の期待しうるこの方式を、より効率の高い運営をしてゆくための基礎資料として高校に行なったのと同様の調査を、中学生に対しても行なったので、その結果を報告する。

Ⅱ. 調査とその結果

調査の内容は、高校の場合と全く同様であるので、詳しい説明は、第5報にゆずり、ここには簡単に結果と、その考察を中心にまとめることにする。

(1) 朝礼での学校長講話の定着度

〔問〕 校長先生がよく話される「7つのF」をあげなさい。(英語でなくてもよい)

	1 A	1 B	2 A	2 B	3 A	3 B	計	%	高 校 %
fair play	27	2	13	17	43	43	145	52.5	79.8
fine play	27	1	11	19	22	40	120	43.5	60.3
fight	11	2	22	19	38	46	138	50.0	83.4
fiction	0	1	0	1	0	1	3	1.1	33.1
flight	0	0	0	0	2	0	2	0.7	29.5
friendship	41	22	13	24	33	43	176	63.8	76.0
fellowship	1	0	2	0	0	3	6	2.2	44.3
計	107	28	61	80	138	176	590	30.5	58.0